

(9) 海域生物の予測・評価に関する意見

分類	主な意見の概要	事業者の見解
海域生物	<ul style="list-style-type: none"> 陸上の動植物ばかりでなく浜・海の小さな生物も季節ごとに3年分調査して結果として示してください。 	<p>陸上の動植物は陸域から浜まで、海域生物は通常の潮位変動の範囲までをそれぞれ原則的な境界として調査を行っています。調査期間、時期及び頻度は、適正な予測を行うために、「沖縄県環境影響評価技術指針」をはじめ、知事意見を勘案し、対象生物及び生物群集の現状を妥当に把握できるように設定しています。</p> <p>調査結果は、既存資料として平成元年度、8・9年度調査結果を、現地調査結果として平成13年度～15年度の調査結果を出現種一覧として資料編に記載しています。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ウミガメについては、成体だけでなく、卵・稚ガメに及ぼす影響を予測・評価すべきである。北側進入灯台の目前で産卵が行われる可能性が考えられる以上、卵の発生に影響を及ぼすおそれのある工事に伴う振動についても予測・評価すべきである。 進入灯台の位置、高さ等について、海浜・海面からの眺望についても調査し、ウミガメの成体の上陸・産卵、稚ガメの向海行動に及ぼす影響を予測・評価すべきである。 工事中による濁水、汚水、空港からの燃料、空港建設にたずさわる作業員、完成後の人口、ゴミの増加などにより、ウミガメが産卵場所を放棄する可能性が大きいと考えられる。 光害に対する認識が甘い。エプロン照明灯や進入灯等は光洩れ対策が困難であり、夜行性の動物に対する影響は大きい。ウミヘビやウミガメは人工光に対して過敏である。石垣島の御神崎灯台が設置されて以来、付近の海岸で産卵が激減した。同様の影響が懸念される。 	<p>ウミガメ類については、工事中の建設作業騒音・振動、供用時の照明が産卵に及ぼす影響について予測を行いました。</p> <p>工事中の騒音・振動の影響については、ウミガメ類が産卵する早朝・夜間には工事がなく、影響はないと予測しました。また、照明などの光の影響については、海浜域に最も近い飛行場駐車場の照明が海浜域から約300m程度離れており、さらに防潮林が存在することから、海浜域における照度の変化はほとんどないと予測しました。</p> <p>保安林の一部に設置される北側の進入灯台は、高さが周辺の樹木より少し高い約16mを計画していますが、周辺樹木に遮蔽され、海浜側からはほとんど見えません。また、光軸は水平面より5度上がった上空へ向けられ、直接海浜への照射はありません。そのため、ウミガメの生息環境に及ぼす影響は小さいと考えられ、上陸・産卵及び稚ガメの向海状況に関する現状傾向、変動状況に変化はないと予測しました。</p> <p>また、エプロン照明はエプロン内を照射しており、海上からはターミナルビル等で遮蔽されるため、ほとんど見えません。なお、光源が海域から視認できる船舶航行用灯台の状況とは異なるものと考えます。</p> <p>ウミヘビについては知見が少ないものの、上記と同様の理由により、生息環境の変化はほとんどないと考えられます。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> 豊富なヒトエグサ等への影響のデータも発表してください。 	<p>ヒトエグサ等の潮干帯の植物については、海域生物の潮間帯生物の項目で検討しており、生息環境の変化は小さく、現状の出現状況に変化はないと予測しております。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> 濁水に含まれる溶質については、ppmレベルのコロイド粒子を短時間に除くことは不可能。これらの微粒子の海水汚染に及ぼす影響は、あらゆる種類の魚介類、珊瑚に対して極めて複雑で、肉眼レベルで考えることは次元の異なる問題です。真に科学的な調査研究が必要ではないか。 	<p>環境水中の濁りは、水質汚濁防止法では河川SS濃度25mg/L以下、沖縄県赤土等防止条例ではSS濃度200mg/L以下、水産用水基準では人為的な濁りの負荷2mg/L以下といずれもSSを対象としています。本事業の評価でも海水の濁りの検討にあたっては、SSを指標としました。</p>